

はじめに

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/28207

はじめに

石川県は、全国的にみても太鼓の盛んな地域といわれる。金沢大学日中無形文化遺産プロジェクトでは、2009年度に石川県の太鼓文化の広域調査を行い、その成果を『いしかわ太鼓まつぷ 2010』（2010年3月）にまとめた。『太鼓まつぷ』には各太鼓団体の基礎的な情報を収録し、伝統的な太鼓と現代的な太鼓の併存する石川県の実態や、各々の太鼓団体の運営のされ方について、ある程度明らかにした。ただし、『太鼓まつぷ』自体は調査結果の生データに近いものであり、詳しい分析をそこで行ったわけではない。

本年度は昨年の成果をふまえてさらに調査研究を行ったが、本報告書はその成果をまとめたものである。内容については以下の通りである。

第1部「広域調査から」では、野澤豊一（金沢大学）が昨年度の調査資料を整理している。ここでは、石川県の太鼓文化の地域性を明らかにし、そのうえで太鼓演奏における身ぶりや音を、演じる者とそれを見る者との間に成立する「パフォーマンス空間」という見地から類型化することを試みている。

第2部「フィールドワークから」では、本年度に口能登地方（特に志賀町と七尾市）を中心にフィールドワークを行った西島千尋（金沢大学）が担当している。口能登の太鼓文化は、伝統的な祭礼、超集落的なコンペティション、現代的なイベントの3つにほぼ等しく重点がおかれているところに独自性があるが、第2部ではその各々について詳細な報告がなされている。太鼓演奏を採譜した部分は独自の試みとして、特に注目に値する。

第3部「経験者の立場から」では、20年あまりの間、地元の和太鼓チームに参加し続けてきた木越治（上智大学）が、和太鼓と自らの関わりを記している。研究報告書としては異色な章だが、実践者の立場から太鼓を論じるというのはあまり例が無いという意味で貴重なだけでなく、一つの体験談としても興味深い。何より、「研究」というスタンスにありがちな対象との距離をこの章がぐっと縮めていることで、この報告書の厚みが増していると思う。

本年度の調査とこの報告書によって、昨年度に課題として残っていたものに、ある程度手をつけることができた。その一方で、調査研究が進むことにより新たな課題もみえてきたが、それらについては次年度以降に取り組むべきものと考えている。

（野澤豊一）